木曽節の創造と普及
――伊東淳の戦略――

中　原　ゆ か り

はじめに

木曽の御嶽　夏でも寒い
袷やりたや　足袋そへて

木曽節は、全国的に知られている日本民謡の１つであり、長野県木曽地方[1]における盆踊り歌でもある。木曽の盆踊りでは、踊り手の一人が高らかに声をはりあげてひと節うたい、次のひと節を別の踊り手がうたい継いでいく。櫓もなく、太鼓を打つこともないが、歌そのもののリズム感、時折入る手拍子、草履が土を蹴る音がリズム楽器となって踊りは揃う。涼風の吹きぬける夏の夜、歌い手たちの朗々としたハリのある歌声が、木曽の谷に響くような印象を受ける。

木曽節、木曽踊りの普及については、明治の末から大正にかけて木曽節、木曽踊りを工夫し、熱心に普及活動をおこなった伊東淳（すなお）（1876-1942）がいる。伊東の努力もあって、昭和の初めの民謡ブームの頃には、木曽節は全国的に有名な「木曽を代表する歌」として知られるところとなった。伊東が1918年（大正７年）に結成した木曽踊保存会は、2018年に結成百年を迎えている。

本稿では、民謡のタイトル、旋律、歌詞も多様で定まらなかった時代に、伊東がどのようにして木曽節、木曽踊りを工夫・創造し、普及活動を行って、「木曽の歌」「木曽の踊り」として認められるようになったのかについて、具体的に記していきたい。

１．木曽節、木曽踊りの工夫
―御嶽山で考える―

伊東淳は、1876年（明治９年）、長野県筑摩郡福島村中畑（現在は木曽町福島中畑）に生まれた[2]。伊東の家は、木曽谷の徳川家直轄地を任された代官・山村家の砲術指導役として焔硝庫を預かる家柄であり、父の匡忱は山村家の旧家臣で、明治維新後は火薬販売を稼業とした。伊東は、1891年（明治24年）、福島小学校高等科を卒業して西筑摩郡役所の給仕となり、雇、書記、課長、郡長代理となった。1913年（大正２年）には郡役所をやめ、既に1893年（明治26年）に町制施行していた福島町の助役に就任し、1915年（大正４年）には町長に当選して1927年（昭和２年）まで４期12年つとめている。伊東が木曽節、木曽踊りを工夫するようになったのは郡役所に勤務していた頃で、町長の職につくと本格的に木曽節、木曽踊りの全国普及に尽力していった（木曽福島町教育委員会編1983，971-972）。

伊東が木曽節を工夫しようと考えたのは、中央線開通後の観光客の増加を見込んだ地域振興のためであった。最初はお座敷で流行っていた御嶽節を木曽節として宣伝しようとしたが、山を１つ隔

てた伊那谷でも同じ御嶽節を伊那節として宣伝していたために譲り、木曽のお座敷歌、盆踊歌であったナカノリサン節に工夫を加えて木曽節として宣伝するようになった（木曽福島町教育委員会編 1983, 972）。ちなみに木曽には多数の民謡があったのだが、その中でも御嶽節、ナカノリサン節には御嶽山をうたった歌詞が多く歌われていた。

ナカノリサン節は、明治の中頃（1890 年代頃）に都会の花柳界でおこった民謡ブームでは、「木曽節」とか「木曽の御嶽」と呼ばれてお座敷で三味線伴奏の端唄風にうたわれて流行っており（添田 1982, 150-151）、数は多くないが唄本等にも掲載されている[3)]。当時の唄本をみると、「木曽の御嶽夏でも寒い袷やりたや足袋そえて」という、現在もよくうたわれてる歌詞がある。当時は歌のタイトルは定まっておらず、曲名がある歌といえば大抵はお座敷で流行している歌であった。曲名の付け方としては、歌詞の冒頭をとって～節とつけたり、歌詞にうたわれやすいテーマをとってそのまま曲名としたり、囃子言葉をとって～節とすることが多かった。つまり、1 つの曲名に一定の旋律、歌詞という考え方は、明治になって西洋音楽が入ってきてからのことであり、それ以前に庶民の間で口頭で伝承されてきた歌は、曲名、歌詞、旋律ともに流動的なものだった。明治期の唄本に記された「木曽節」「木曽の御嶽」といった曲名は、よくうたわれる歌詞「木曽の御嶽夏でも寒い袷やりたや足袋そえて」の冒頭をとった名称であることがわかる。そして「木曽…」ではじまるこの歌詞は、外から木曽をみる者の立場でうたわれていると考えられる。なぜなら木曽では、御嶽山を「御嶽」「お山」と呼んでおり、「木曽の御嶽」という言い回し自体が存在しない。つまり木曽の人々は、外から入ってきたこの歌詞を、そのまま受け入れて、うたうようになったのである。

御嶽山は、標高 3,067 mの独立峰で、日本で最も信仰登拝の盛んな山である。幕末には、江戸だけでも約 500 個の御嶽講が存在したといわれる。登山口としては、飛騨側に小坂口（飛騨口）、木曽側からは黒沢口と大滝口の 2 つの登山口があり、夏の登拝時期になると木曽の町には白装束に檜笠、金剛杖の信者たちがあふれ、宿も満杯だった。要するに、都会のお座敷で「木曽の御嶽」をうたった歌詞が流行るほどに、御嶽山はよく知られていたのである。

ナカノリサン節の実際のうたい方としては、7775 の歌形に反復や囃子言葉を入れて、「木曽のナーナカノリサン木曽の御嶽ナンジャラホイ　夏でも寒いヨイヨイヨイ　袷ナーナカノリサン袷やりたやナンジャラホイ　足袋そえてヨイヨイヨイ」とうたい、上の句と下の句は同一旋律の反復となる。つまり木曽における「ナカノリサン節」という呼び名は、囃子言葉の一部をとったものであり、「なかのりさん節」「中乗りさん節」等の表記もあてられている。ナカノリサン節がいつ頃から木曽でうたわれていたのか詳しいことはわからないが、『信濃民謡集』（1929, 3）によれば、明治の初め頃に中津の踊りを持ちかえりナカノリサン節につけたという伝承もあったようだ。いずれにしても、伊東が木曽に生まれ、木曽節を工夫しようとした時点では、既にナカノリサン節はお座敷でうたわれ、盆踊りでもうたい踊られていたのであった。

さて、伊東はナカノリサン節を、花柳界で流行ったよく歌われる歌詞の冒頭をとっての「木曽節」ではなく、木曽を代表する歌という意味での格調高い「木曽節」にしようと、節回しやうたい方に工夫を重ねていった。伊東がどのようにして「木曽節」を作り上げたのかについては、『木曽節と木曽踊り』（小幡 1984）に詳しい。それによれば、伊東は郡役所の書記をしていた頃から宴席への参加が多く、木曽の中でも地域によってうたい方や節回し、テンポがまちまちなことに気づき、旋律を含めてうたい方を統一したいと考えた。またナカノリサン節は、音律が低く、節の継ぎ目が

はっきりしない勢いのない歌、つまり地味な歌であった。そこで当時お座敷で人気だった御嶽節（後の伊那節）や佐渡おけさ、郡上節等を参考にしながら、毎年数回御嶽山に登頂し、山麓のあちこちから御嶽山を見上げながら、ナカノリサン節に工夫を加えていった。つまり伊東にとっては、ナカノリサン節の節回しやうたい方を改良し、当時の「今風な」歌、木曽の内外の人々にとって馴染みやすく、格調高い木曽節を工夫するためには、御嶽山に登頂し、御嶽山で考えることが必要だったのである。

伊東の御嶽山へのこだわりは、踊りの振りを工夫するにあたっていっそう具体的になっている。御嶽山の山頂部は南北に3.5キロにわたる台形になっており、見上げる場所によって峯の形は違ってくる。伊東は権現滝から奥へ入った尾根から、御嶽をみながら踊りの所作を工夫している。御嶽の山頂部は、尾根の一番北側、三ノ池の上、剣ケ峰の三カ所が突き出ており、それを踊りの振りに入れた。「最初これが三岳の剣ケ峯、これが三の池の頂上、これが開田の頂上といいながら教えておったところ、王滝からおらほうの頂上が無いとネジ込まれて、王滝の頂上は低かったが麓の三つの村の名を入れて、これが王滝の頂上だ、これが三岳の頂上だ、こいつが開田の頂上だとした…（略）…踊りの所作は権現滝の奥へ行って御嶽に教わるとよい…」と、伊東は自ら改良した踊りの所作を教えながら、地域の人たちの意見をきいて改良を加えていったのである（小幡 1984）。

御嶽山の登山道には、神仏の像や旧跡、修行場、多数の霊神碑（行者や信者が亡くなった後にたてる）があり、山頂近くでは御嶽講の中座と呼ばれる霊媒がトランス状態となって託宣をおこなう等、信仰登拝の盛んな山ならではの独特の雰囲気がある。生駒（1966：285）によれば、幕末には芸者・芸人・吉原遊女などの間に多くの御嶽信者がみられ、ブラッカー（1995：174-175）によれば、講の中には、音楽家と俳優だけの講もあり、長唄の芳村伊十郎や、舞踊家の武原はんも毎年御嶽山に登っていたという。いってみれば、御嶽信仰そのものは特別に芸能とは関係していないものの、御嶽山に登拝することで芸の道を究められると感じる人たちがいたのである。

伊東と御嶽山との関係に注目すると、江戸末期から明治にかけては木曽谷全体に御嶽信仰が普及しており、伊東の生まれ育った福島の中畑には、御嶽講の開祖・普覚行者の高弟金剛院順明を大先達として文化年間に結成された太元講の本拠地があった。太元講では、中畑の津島神社で年に一度の大日待をおこない、役員や行務者の他に中畑の講員全員が加わるなど、御嶽登拝の他にも様々な行事があった（生駒 1975：285-291）。伊東の家筋は講の役職や行務にはなかったが、青年になると御嶽教のお経を唱え、講に入る慣習があった当時、伊東も中畑の太元講に入って毎年御嶽山に登拝し、大日待等のお勤めに参加したことであろう。伊東は、登山客の先頭にたって道案内をする「先達」の役目もはたしており（長谷川 1917）、熟練した登山者、案内人として認められていた。そしてナカノリサン節は、その御嶽山をうたった歌なのである。御嶽山をうたったナカノリサン節は、伊東が何度も御嶽山に登拝して考えることによって、木曽節、木曽踊りとして完成したのであった。

信仰の山であった御嶽山だが、明治以降、登山道が少しずつ整備され、山頂に郵便局がたち、外国人の登山客も増加して新たな時代を迎えていた。そして御嶽山への登山口へと繋がる木曽において、新しい産業、経済の発展を期待する出来事が、鉄道の整備であり、1911年（明治44年）の中央線全通であった[4)]。全通して最初の列車は、5月2日、名古屋を朝6時35分に出発し、木曽福島には12時8分に到着して駅構内で歓迎をうけ、長野県主催の式典、物産の陳列があり、余興として「木曽芸妓の中乗さん踊り即ち木曽節」が披露されたのである（『信濃毎日新聞』1911年5月2日）。

信濃毎日新聞では中央線全通にあわせて1911年（明治44年）年5月1日から「木曽パノラマ―汽車より見える」を連載し、東京朝日新聞では「中央線案内―木曽の旅」の記事に、「ねざめの床」「木曽川第一懸橋」「木曽の御嶽山」等の写真を掲載している（『東京朝日新聞』1911年5月2日）。いよいよ鉄道による木曽観光の時代がはじまったのである。

2．木曽節、木曽踊りを知らせる
―免状・解説本の発行・著名人との繋がり―

中央線の開通と前後して、木曽では観光客用の書籍も刊行されている。『木曽路』（征矢野編1907：50）には「俗謡に木曽ぶしとて一種木曽特有の節あり」と木曽節の歌詞が掲載された。『木曽案内』（津島編1910：26-27）には、御嶽の麓の村々に古代より木曽踊りがあったとして数首の歌詞が紹介されている。『木曽』（丸山1917：249-263）では木曽節の解説に15頁をさき、囃子言葉の「ナカノリサン」についての考察、多数の歌詞を紹介し、踊り方や歌い方についても記している。木曽で発行されたこれらの書籍では、木曽節、木曽踊りを木曽に特有の伝統的な木曽の歌、踊りとして記している。

木曽と木曽節の宣伝が際立ってくるのは、新聞記事である。読売新聞の「お国自慢」のコーナーの1位として木曽の家高荒波による「なかのりさん」が掲載され、「我郷古来の俗謡でどんな流行唄にも圧倒されぬ唯一のもの」と言い切った上で、「木曽の御嶽夏でも寒い袷やりたや足袋そえて」の歌詞の解釈として、御嶽山の山小屋につとめる夫を想う妻の情をうたった歌であると想像して解説している（『読売新聞』1910年7月14日）。記事の日付は中央線全通の1年前であり、読者による投稿というかたちではあるが、結果的には新聞に掲載されたことで、木曽節を用いた木曽の宣伝となったことであろう。

他にも「木曽へ木曽へとみな行きたがる木曽に秀治があればこそ」と木曽節に噂話的にうたわれた木曽福島三河屋の女将を紹介した記事（『読売新聞』1915年6月23日）や、「江戸には江戸っ子があれば木曽にも木曽ツ子がある…」とはじまって名をふせつつも、特定の人物の面白さを述べ、声はむしろ悪声としながらも「若しそれ此聲をして木曽節に乗ぜしむる時は何とも云へぬ不思議な力に襲はれると同時に、天與の純な眞の聲を感ずるのである。名古屋辺から流れ込んでくる芸妓や酌婦の木曽節は決して木曽節ではない。木曽の天地と全く融合した、聲から純朴に迸った木曽節でなければ駄目である。真の木曽節を聞かんとするものはよろしく此の木曽ツ子〇〇君に平身低頭して人生の真の聲に触るべきである」と、木曽生まれ木曽育ちによる木曽節のよさを強調している（『読売新聞』1915年7月2日）。この記事は、伊東が町長となってから著した『木曾のなかのりさん』第2版の「著者逸話」におさめられており、伊東淳のことを書いた記事であることがわかる（伊東編1917：113-114）。読売新聞にこの記事が掲載された時点では、伊東は福島町の助役をつとめており、4カ月後の1915年（大正4年）11月に福島町長に当選した（木曽福島町教育委員会編1983：971）。

伊東が著した『木曽のなかのりさん』[5]という木曽節の解説書は、日本全国に送付、新聞等にも宣伝を掲載している（『朝日新聞』1917年8月19日など）。伊東は、ナカノリサン節を格調高い「木曽節」にするために苦労を重ねたと自ら語りながらも（小幡1984）、わざわざ本のタイトルを『木曽のなかのりさん』とした。当時、既に巷に出ていた芸妓むけの唄本にも「木曽節」は掲載されており、おそらく「木曽節」のタイトルではお座敷の流行り唄のイメージが先行する可能性もあると考

えたのではないだろうかと、筆者は推測している。また、タイトルを『木曽のなかのりさん』とすることで、木曽という土地になかのりさんと呼ばれる名物的な人物がいたのかと思わせる効果がある。実際本を開けば、なかのりさんは単なる囃子言葉だということがわかるのだが、「ナカノリサン」の囃子言葉は、歌の冒頭の「木曽の」のあとにすぐくる囃子言葉でもあり、「なかのりさんとは何なのか」という話題が木曽においても何度ももちあがっていたらしい。上述した『木曽』（丸山 1917：250-252）では、囃子言葉に「中乗りさん」の文字をあて、木曽川で木材を川流しする人夫のこととする説、中仙道の旅客が馬に乗る時、真ん中に乗った客のことを中乗りさんと呼んだとする説を紹介している。全国に送るために作成した伊東の『木曽のなかのりさん』では、最初からその話題性をねらってタイトルを決めたことが推測できる。例えば1927年（昭和2年）6月22日のラジオ JOAK 東京19：25からは植松安「木曽のなかのりさん」と題した趣味講座があり、「慶長7年木曽御勘定並方々より受取渡帳」を根拠に、木曽川でいかだを流すいかだ乗りの人であり、若者である中乗りさんを想う乙女の可憐な胸をうたったという解釈をしている（『朝日新聞』1927年6月22日、『読売新聞』1927年6月22日）。『木曽のなかのりさん』のタイトルにしたことで、「なかのりさん」についての推測は木曽をめぐる話となり、木曽節がお座敷の流行り歌ではなく、木曽でうまれたオリジナルの歌であるという印象をもたらす効果があった。

伊東は、1918年（大正7年）、「木曽踊保存会」を結成し、自ら会長となった。さらに伊東は、木曽踊りを教える「司（つかさ）」を名乗って、木曽に来る客には熱心に踊りを教え、踊りを覚えると「相許し候事の木曽踊り」という免状を発行して、「木曽踊りの家元」とも呼ばれることもあった。免状は、いわゆる賞状のような体裁のものだが、まれに木曽土産でもある菅笠に書いて渡すこともあった。当時、免状発行は、民謡や民俗芸能では珍しいことであり、話題になったようだ。新聞をみていくと、『朝日新聞』1925年（大正15年）4月23日には、小野郡長白石喜太郎が免状をもらい「相許し候事の木曽踊」が俳句みたいな洒落たもの、と書かれている。また、読売新聞1928年（昭和3年）1月1日には、「免状は通り越して優等を賞する檜笠　二時間の猛練習でこの大成績だ」の見出しのもと、特派記者の石橋球三郎のエッセイが掲載され、「相許されるまでの木曽踊り」のタイトルのもとに木曽踊りを教える伊東淳と石橋記者が二人で踊る写真が掲載されている。記事によれば、石橋記者は免状授与の266号めとなり、伊東淳は福島町では「踊りの校長」で通っているともあった。この他に師範役の免状もあり、「相許し候事の師範役」と書かれていた。同年11月に西筑摩郡総合事務所が発行した『きそ』によれば、免状は502号、師範役免状は36号まで発行したといい（西筑摩郡総合事務所 1928：100）、1932年（昭和7年）には「相許し候事の木曽踊」の免状は1000号となっている（『信濃毎日新聞』1932年12月27日）。

保存会を結成し、免状を発行するようになって後、1922年（大正11年）、伊東は『木曽のなかのりさん』第3版を、第2版とは全く異なる体裁、内容で発行した。第3版の表紙は、洋画家であり書家であった中村不折（1866-1943）によるものである。中村不折は、1906年（明治39年）8月、文芸評論家の長谷川天渓（1876-1940）や新聞記者等と御嶽に登頂しており、先達をつとめたのが伊東淳であった。六合目の小屋で休憩し、炬火を手にして登りはじめたその時、先達の伊東が声をはりあげて木曽節をうたい、「…遠く乗鞍の山霊までを駭かしたるならん」と、長谷川は記している（長谷川 1917：101）。この登山が縁となり、あるいはそれ以前からなんらかの知己があったのかもしれないが、いずれにしても伊東は直接、3版の表紙を中村不折に依頼することができただろう。

第3版の内表紙には「宮内省式部職雅楽部講師理学士、田邊尚雄先生序文」と書かれており、その序文には「盆踊の三要素たる歌詞と音楽と踊り方と、此の三拍子揃ふて、最も上品な、最も面白い、且つ最も藝術的なるものは『木曽のなかのりさん』を措いて日本国中に他に1つもないと信ずる」と記されている。田邊尚雄（1883-1984）は、音楽学者として著名な人物であり、後に著した自叙伝によれば、1920年（大正9年）8月、福島町の依頼により「音楽の文化的使命」という講演会に招待されて音楽鑑賞教育の必要性を説き、蓄音機レコードの使用を力説した。その夜は料亭で歓迎会が開催され、伊東町長が芸妓を率先して盛んに踊ってみせ、田邊も歌と踊りを教わった。そして田邊が夜半までかかって踊りの手を覚えると、「相許し候事の木曽踊」と菅笠に書いた木曽節の免許状を受け取ることになった。その夜は町の祭りで1000人近くが踊っており、田邊もその中に混じって宿の浴衣と下駄ばきで夜明けまで踊ったという（田邊 1982：230）。

伊東淳から木曽踊りを伝授されて免状を受け取った田邊は、東京へ戻ると自身の開く「家庭踊り」にとりいれるようになった（田邊 1922：79-87）。家庭踊は、もとはといえば音響学者の田中正平（1862-1945）が邦楽向上のために1908年（明治41年）に設立した「美音倶楽部」にある。美音倶楽部には、家庭的な遊芸趣味の楽しみ会、山村流舞の講習、一同で楽しむ惣踊であり、総踊を田邊が引き継いで家庭で踊りを楽しむための家庭踊とした。田邊の著した『家庭踊解説』には、家庭踊番外として木曽踊の解説があり、楽器は三味線でも楽隊で踊っても面白く、蓄音器レコードを用いるのもよいとしている（田邊 1922：79-87）。

当時田邊は宮内庁雅楽部の講師をしており、各宮殿下の家庭でも音楽の講義をして家庭踊を教える機会があった。『木曽のなかのりさん』第3版には、伊東淳による導入的な解説として「木曽節と木曽踊り」があり、1921年（大正10年）3月24日に北白川宮御殿において、また1922年（大正11年）6月15日には朝香宮御殿において、田邊尚雄が家庭踊を教え、木曽踊りも夜遅くまで楽しんだとある。さらに1922年（大正11年）6月15日の参加者として、久邇宮殿下、全妃殿下、良子女王殿下、御妹宮殿下、久邇宮若朝融王殿下、朝香宮殿下、朝香宮妃殿下、全王子及王女、武田宮妃殿下、北白川宮妃殿下、東久邇宮妃殿下が記されている。

北白川御殿での木曽踊りについては、『信濃毎日新聞』に、「北白川宮邸の一夜　木曽踊を踊らせ給ふ　両妃殿下は直ちに御上手になり女中一同を御召になって深夜迄興ぜらる」の見出しのもと、田邊が2月から講義にいき、1921年（大正10年）3月24日夕食後の雑談で家庭踊の話がでて踊ることになり、木曽節のレコードをかけて木曽踊りにも興じたとある。田邊は同年3月に平譲へも行き、知事官邸で高官家族を集めて家庭踊、木曽踊りを教えたという（『信濃毎日新聞』1921年5月5日）。記事の最後には、田邊から伊東町長への手紙によると記されている。

1922年（大正11年）6月15日の朝香宮のお邸での木曽踊りについては、田邊自身が後の随筆集に記している。朝香宮のお邸にて北白川、朝香、東久邇の各宮妃殿下、久邇宮良子女王殿下で、夜遅くまで家庭踊を踊り、その後民謡踊として木曽踊りを夜遅くまで聲を揃えて歌い踊ったという。田邊によれば、この話を知った伊東淳は、羽織袴で町の助役を従えて宮内省へお礼に行き、田邊の家にも寄ったという（田邊 1981：110-111）。日付は前後するが、『読売新聞』1922年（大正11年）6月12日には、「良子女王殿下が理学博士田邊尚雄に就いて家庭踊を試み給ふ」の見出しの記事があり、『読売新聞』1922年（大正11年）6月26日には田邊自身による家庭踊全般についての解説が掲載されている。

1922年（大正11年）8月18日の『信濃毎日新聞』には、「家庭踊の皷吹者　田邊学士わざわざ木曽へ　天下一品と激賞　良子女王殿下が一番お上手と謹話」との見出しのもと、既に家庭踊に「木曽踊り」を取り入れていた田邊が、木曽踊りの日程にあわせて8月15日に木曽へ行き、盆の木曽踊りの群れに混じって踊り、岩屋旅館に宿泊して寝覚めの床を見て帰ったことや、良子女王殿下が特に上手く、北白川宮殿下は軍隊に取り入れることを希望していると記している。

その後も読売新聞1924年（大正13年）8月15日には、旅のエッセイで有名な松川二郎が「宮殿下がお揃いでお踊り遊ばされた木曽の中乗りさん」と、木曽踊りについての解説記事を書いている。田邊をつうじて皇室関係者が木曽踊りを楽しんだ話は、少なくとも数年間にわたって話題になり、木曽節、木曽踊りの格をあげたことであろう。

3．木曽節、木曽踊りを広める
―木曽踊司の講習会、芸妓たちの活動―

上述したとおり木曽節は、木曽に限らず都会のお座敷で芸妓たちによって端唄風に歌われていた。伊東が改良した木曽節、木曽踊りを、木曽での中央線全通式で踊ったのも芸妓たちであった。伊東も、他所からの来客を歓迎する宴等で、芸妓たちとともに木曽節、木曽踊りをうたい、踊っている。

芸妓は、移動が多く、レコードやラジオが普及する前には、歌を伝えるメディア的な役割を果たしていた。木曽に関しては、『全国花街めぐ里』（松川1929）に、「木曽福島」として紹介されて木曽節、木曽踊りの解説があり、木曽福島の花街の料理店が11軒、芸妓が15名で、いずれも料理屋がかかえる内芸者であったという。主な料理屋として、三河屋、見晴（みはらし）、精々楼、十一家等々があり、芸妓としては名月の才三、見晴の吉彌、三河屋の小秀、精々楼まる子、十一家の八重次（やえじ）、玉川家今子の名をあげている。木曽の芸妓たちは皆、名古屋からで、土地っ子は一人もおらずとも書かれている（松川1929：329-331）。木曽には、当時から置屋がなかったことがわかる。

上述した『読売新聞』1915年7月2日の記事には「名古屋辺から流れ込んでくる芸妓や酌婦の木曽節は決して木曽節ではない。木曽の天地と全く融合した、聲から純朴に迸った木曽節でなければ駄目である」とはっきり書かれており、芸妓の歌よりも木曽生まれ木曽育ちの伊東の歌をよしとしている。しかし名古屋から木曽に来た芸妓の歌を一律に否定しているわけではない。上述した読売新聞の「木曽へ木曽へとみな行きたがる木曽に秀治があればこそ」と木曽節にうたわれた木曽福島三河屋の女将の記事では、「秀治は十数年前に名古屋から木曽川を遡ってきたただの芸者で…木曽にふさわしい透明な心意気をもっている…今は単に木曽福島三河屋の女将として…」と、秀治の心意気が木曽にふさわしいと肯定している。記事によれば、「木曽へ木曽へとみな行きたがる木曽に秀治があればこそ」の歌詞を、木曽を訪れた渡辺千秋（1843-1921）が短冊に書いて秀治に渡した。渡辺は、鹿児島県知事、滋賀県知事、北海道庁長官等を歴任して宮内省に勤務しており、長野県出身の官僚として名が知れていたことだろう。記事には、秀治をうたいこんだ歌詞は木曽節とともに広がり、秀治の名は後世に残るだろうとまで書かれている（『読売新聞』1915年6月23日）。従って芸妓の中には、木曽へやってきて後、木曽から別の場所へ移っていく芸妓もあれば、何らかの理由で木曽に留まる芸妓もおり、周囲の評価の高い人物もいたのである。

芸妓が歌や踊り等の芸に優れているのは、誰しも認めるところであった。中央線全通式という晴れの舞台での木曽節、木曽踊りも木曽芸妓によるものであり、最初に木曽節をレコードに吹き込んだのも芸妓であった。森垣（1960）によれば、1930年（昭和5年）、わざわざ木曽福島まで出張し、伊東町長の熱心な斡旋と配慮で盆に町民が踊り狂う様子をみていっそうの面白さを味わい、木曽節を宣伝の材料として町を観光で繁栄させたいという町長の願いと、木曽節のレコードを吹き込みたいという森垣の思いが一致して、レコードを吹き込むことになった。そしてその木曽節のレコードは異常なまでに売れ、木曽節は全国のすみずみまで知られることになった（森垣 1960：128-129）。『ワシ印レコード総目録』によれば、この木曽節のレコードは、木曽芸妓の名月才三、名月小才、中村楼静子によるものである（ワシ印レコード番号3683, 3684）。森垣によれば、民謡のレコードとして最初によく売れた一枚が「八木節」で、1916年（大正5年）のひと夏は、蓄音器があればこのレコードをかけない家はなかったという程の全国的な大流行だったという。そして同じ年に、「磯節」、「木曽節」が吹き込まれて流行し、全国的な民謡熱に繋がった（森垣 1960：37）。

木曽の芸妓たちは、東京方面の寄席にも出演している。例えば『読売新聞』1916年5月12日には「木曽芸妓来る」の記事があり、木曽福島芸妓の6名が14日上京して京橋や人形町等の5席に出演するとある。恐らく読者がこの記事を見て寄席を訪れることを期待しての広告であろう。ラジオ放送に注目すると、1928年（昭和3年）6月には木曽の芸妓たち6名がラジオ放送の出演のため東京へ出発している（『南信日日新聞』1928年6月12日）。また、東京や大阪で出版された唄本をみると、大正時代に入ってからは木曽節が多数入っており、各地のお座敷でうたわれるようになったことがわかる。レコードについても、各地の芸妓が木曽節を吹き込んでおり、木曽節が全国的に広がっていった状況がわかる。しかし「木曽芸妓」といわれるように、木曽節の地元は木曽であり、同じ芸妓でも木曽芸妓は何かが違うはず…といった雰囲気があったようだ。

芸妓たちは、芸に優れ、美しく着飾ってお座敷に出て流行の端唄をうたうという、地域芸能のアイドル的な存在、スター的な存在でもあった。しかしその一方で、酒の席に呼ばれることから、あまり上品ではないと敬遠される面もあったようだ。伊東の著した『木曽のなかのりさん』第2版（1917年）には、芸妓たちが踊る木曽踊りの写真が掲載されているが、第3版（1922年）は、袴姿の男性たちが踊る写真にかわっている。伊東は、保存会、免状、皇室関係者の木曽踊りが話題になるにつれて、上品な木曽節、格調高い木曽節というイメージを普及させようとしたのであろう。

伊東は、県内・県外から招待を受けて木曽踊りの講習会を開いている。例えば長野市婦人会主催で「木曽福島町長伊東淳氏を招して城山館にて家庭踊りとして仲乗さん踊りの講習（『南信日日新聞』1922年12月24日）、「なかのりさんの本家木曽福島の伊東町長は…岡山教育会の招聘でなかのりさんの宣伝教授にいく」（『朝日新聞』1924年5月2日）等である。中には、県主催の蚕糸講習会が福島町で開催される折、木曽踊りの講習の受講者を募集し、前町長の伊東が講師となって教授し、受講者には免許状を授け御嶽登山案内もあり、出席者には汽車賃5割引きの特典をつけるなどの大がかりな企画もあった（『南信日日新聞』1929年7月11日）。また芸妓たちに教えることを目的に招聘された例として、花見のシーズンを前に伊那町料芸組合で費用をいっさいもち、伊東町長と福島芸妓の添三を呼び、なかのりさん踊りの講習会を開催したという例もあった（『南信日日新聞』1925年12月24日）。伊東は、招聘先にあわせ、町長として司として講習会に応じ、あるいは芸妓とともに講習会に出ていたのである。お座敷の芸妓たちの木曽節と、木曽踊司や保存会の木曽節という、2セット

の伝承の場があることで、木曽節は広がっていったといえる。

おわりに

本稿では、木曽節の創造と普及について、伊東淳の活動を中心において記述してきた。伊東は、既に木曽でうたい踊られていたナカノリサン節の節回しやうたい方を改良して、正調木曽節をつくりあげ、結果的にはその木曽節が全国的に有名になった。伊東が全国的な好みを読めるようなセンスが身についていたのは、木曽路一番の繁華街である福島の料亭に出入りして地元のうたい方の多様性を知り、全国的に人気の流行り歌を知っていたことと無縁ではないだろう。そして伊東による正調木曽節の工夫は、御嶽山をうたったナカノリサン節を選ぶことに始まり、御嶽山に登頂して考え、完成させることができた。木曽踊りの振りの工夫にあたっても、御嶽山の峯の形を振りに入れ、木曽は御嶽山とともにあるということを全面に出している。全国で流行するような歌であるだけではなく、木曽の人々が好む歌でなければならず、何より木曽の人として御嶽とともに生きてきた伊東自身が納得できる歌でなければならなかったのである。

伊東は自ら町長となり、木曽踊保存会を結成し、免状を発行し、解説本を著した。御嶽の登山口であり木曽路一の繁華街であった木曽福島を訪れる客たちに、木曽踊りを教えて免状を発行し、積極的に繋がりをつくった。その繋がりから、木曽節、木曽踊りは、新聞記事に書かれ、木曽節のレコードとなり、家庭踊りでの実践となり、皇室関係者の間で踊られるという、話題性に富んだ歌、踊りとなっていった。そして木曽節は、木曽のみならず各地のお座敷で芸妓たちがうたい、教育会等でも講習会を開催して好んで習うようになって広まっていった。木曽節は、芸妓、レコード、新聞、ラジオといったメディアで取り上げられ、多くの人々に知られることによって、「正調木曽節」として認められていったのである。

謝辞

本稿は、2016 年 2 月 20 日、木曽郡民会館で開催された「木曽踊サミット」における筆者による基調講演「木曽のなかのりさん」の一部を大幅に加筆修正したものです。当日会場にいらしてくださった皆さんには、有意義で暖かい感想をいただきました。また、2013 年の夏に木曽踊りを見学して以来、木曽踊保存会の皆さんには大変お世話になり、木曽に住む皆さんには貴重なエピソードを多数提供していただきました。研究に関しては、千村稔氏より有意義なご助言をいただき、荻上淳恵氏には伊東淳に関する貴重な資料を見せていただきました。お世話になった木曽の方々、そして筆者が初めて木曽に行った時に偶然知り合い、木曽の魅力、木曽踊りの魅力を教えてくださった故三上みち子氏に、感謝の気持ちをささげます。

註

1）現在、「木曽」、「木曽路」、「木曽谷」といえば、木曽郡（上松町、南木曽町、木祖村、大桑村、王滝村、木曽町）と岐阜県中津川市の一部（旧神坂村、および旧山口村）をさす。）

2）福島村は、明治の初めまで尾張藩領だったが、1871 年（明治 4 年）7 月に名古屋県、同年 9 月には伊那県、11 月に筑摩県の管轄となり、1874 年（明治 7 年）の町村統合で筑摩郡福島村と岩郷村が合併して福島村となって、1876 年（明治 9 年）、長野県の所属となった。1879 年（明治 12 年) の郡区町村編成法の施行により西筑摩

郡福島村となり、1889 年（明治 22 年）の町村制の施行により福島村が単独で自治体を形成、1893 年（明治 26 年）には町制施行して福島町となった。福島町は、1967 年（昭和 42 年）に新開村と合併して木曽福島町が発足、翌 1968 年（昭和 43 年）には木曽郡木曽福島町となり、2005 年には木曽福島町、日義村、開田村、三岳村が合併して木曽町となった。

3）唄本としては、四竈編（1894）など。大正に入ると、多くの唄本に木曽節が掲載されるようになる。また手風琴や笛のための楽譜集にも木曽節があり（町田 1909，1910）、音楽として木曽節が一般化していた面もあると考えることができる。

4）木曽を通る鉄道としては、明治政府が 1876 年（明治 9 年）、東京と関西を結ぶ鉄道幹線として中山道鉄道を発表したが、1886 年（明治 19 年）には東海道線に変更され、1892 年（明治 25 年）には中央線として設置されることとなった。中央西線の路線の招致をめぐって木曽路を通る案と伊那路を通る案で激しく対立し、1894 年（明治 27 年）に木曽路を通る線が決定した。そして名古屋から中津までが 1902 年（明治 35 年）、木曽福島までは 1910 年（明治 43 年）に開通し、東京方面からは塩尻を通って宮ノ越までが 1910 年（明治 43 年）、1911 年（明治 44 年）に木曽福島と宮ノ越が通ってようやく全通した。

5）『木曾のなかのりさん』の初版については、図書館、資料館等には所蔵がなく、現時点では確認できていない。私が確認しているのは 1917 年（大正 6 年）に発行された第 2 版以降である。

参考文献

生駒勘七 1975『木曽の庶民生活―風土と民俗―』国書刊行会

――― 1966『御嶽の歴史』木曽御嶽本教

伊東　淳編 1917『木曽のなかのりさん』（訂正再版）、蘆沢書店

伊東　淳 1922『木曽のなかのりさん』（訂正 3 版）、加藤清助発行

――― 1923『木曽のなかのりさん』（訂正 4 版）、加藤清助発行

――― 1928『木曽のなかのりさん』（訂正 5 版）、加藤清助発行

大日方利雄 1929『信濃民謡集』信濃毎日出版部

小幡　充 1984『木曽節と木曽踊り』私家版

木曽福島町教育委員会編　1983『木曽福島町史　第 3 巻』木曽福島町発行

四竈小辰編 1894『古今雑曲集』共益商社

征矢野七郎編 1907『木曽路』諸式用達商会（福島町）

添田知道 1982『添田唖蝉坊・流行歌明治大正史』刀水書房

高野辰之 1915『俚謡集拾遺』六合館

田邊尚雄 1922『家庭踊解説』音楽と蓄音機社

――― 1981『随筆集　音の響き』明玄書房

――― 1982『続田邊尚雄自叙伝』邦楽社

津島壷岐 1910『木曽案内』藤森書店（木曽福島町）、明倫堂書店（松本市）発行

十字屋楽器店 1925『ワシ印レコード総目録』東京銀座十字屋楽器店発行

中原ゆかり 2016a「長野共進会の木曽節：ふたつの木曽節をめぐって」『愛媛大学法文学部論集人文学編』41．23-28

――― 2016b「鉄道時代の観光戦略と歌：木曽節をめぐって」、愛媛大学人文学会編『人文学論叢』18，63-74

西筑摩郡総合事務所編 1928『きそ』西筑摩郡総合事務所発行

日本放送協会編 1993『復刻　日本民謡大観　中部篇（中央高地・東海地方）』日本放送出版協会

野田桂華編 1910『はやり唄独まなび』沢田正次郎出版

長谷川天渓 1916「木曽の御嶽」、『少年世界』12（13），pp64-69.

――― 1917「御嶽登山」、伊東淳編『木曽のなかのりさん』、pp95-110.

ブラッカー，カーメン（秋山さと子訳）1995（1975）『あずさ弓：日本におけるシャーマン的行為』（下）、岩波書店

前田林外 1907『日本民謡全集』本郷書院

町田桜園 1909『最新手風琴案内』盛林堂

――― 1910『清笛明笛独習自在』盛林堂

松川二郎 1929『全国花街めぐり』誠文堂

丸山直光 1917『木曽』藤森至誠堂

森垣二郎 1960『レコードと 50 年』河出書房新社

歴史編纂委員会（2019）『木曽踊保存会―発足 100 周年記念誌』木曽踊保存会

参照した新聞

『朝日新聞』『読売新聞』『信濃毎日新聞』『南信日日新聞』

参考 URL

木曽踊保存会
https://kiso-odori.com/　（最終閲覧日　2022 年 11 月 30 日）

（愛媛大学法文学部教授）

Creating and Popularizing "Kiso-bushi": Sunao Itō's Strategy

by

Yukari Nakahara

"Kiso-bushi" is a folk song from the Kiso district of Nagano Prefecture often used as music for bon-dance. When the Chūō Line railroad opened at the end of the Meiji period, "Kiso-bushi" and its associated dance, "Kiso-odori," underwent innovation and publicity in an effort to promote tourism as a new regional industry. Thus, by the time of a folk song boom at the beginning of the Shōwa period, "Kiso-bushi" was already well known throughout Japan. This paper introduces the efforts of Sunao Itō (1876–1942), the central figure in polishing and pitching "Kiso-bushi" and "Kiso-odori."

"Kiso-bushi," AKA "Nakanorisan-bushi," had been a party song in cities and was a bon-dance song in Kiso as well. To modernize the song and refine its dance, Itō made creative modifications to the melody and choreography—even visiting Mount Ontake in Kiso for inspiration many times a year—and completed new versions. After the Chūō Line had fully opened, Itō became mayor of Kiso-Fukushima, and wrote a book on "Kiso-bushi" titled *Kiso no Nakanorisan* [River Log Drivers of Kiso], sending out copies across Japan. He also organized Kiso-odori Hozonkai [Kiso-odori Preservation Association] in which he took the title of Tsukasa (head) for teaching "Kiso-odori." He earnestly taught the dance to visitors from elsewhere and presented them with certificates when they learned it. One student, Hisao Tanabe (1883–1984)—who was then an instructor in the Gagaku Department of the Imperial Household—received his certificate in Kiso and taught the song and dance at gatherings of Katei-odori no Kai [Family Dance Club] in Tōkyō as well as to palace insiders, garnering newspaper headlines. "Kiso-bushi" and "Kiso-odori" came to be regarded as elegant, while Itō and members of the association began to receive requests for instruction both from within Nagano Prefecture and from beyond.

In sum, Itō's strategy in promoting "Kiso-bushi" and Kiso dance was distinguished by expanding the song's audience and taking advantage of the media to garner interest.